作品研究

銅版画家池田良二の原風景とアートプロジェクト「落石計画」

都築千重子

北海道東部、根室市の南西に位置する北海道三大秘岬のひとつ、落石（おちいし）岬。「落石」とは山の尾根のくぼみを意味するアイヌ語の「オク・チシ」に由来し、本土につながる低地にあたるこの地域の地形的な要因から命名されたという。古くからこの周辺では漁業が営まれ、しだいに根室市の水産業の一地区として発展していった。根室出身の銅版画家池田良二（一九四七―）は、一九八五年の母の死に際し故郷に帰った折に、落石岬の荒涼とした風景にたたずむ廃墟と化した旧落石無線送信局（正式名称は「落石無線電信局根室受信所」）［図1］と運命的な出会いを果たす。以後この旧無線送信局は池田作品の主要モチーフになり、当館所蔵の五点（すべて一九八八年制作）にも、この旧無線送信局の写真が用いられている。

図1　海霧に包まれたたずむ旧落石無線送信局（現池田良二スタジオ）2009年8月撮影
写真提供：井出創太郎

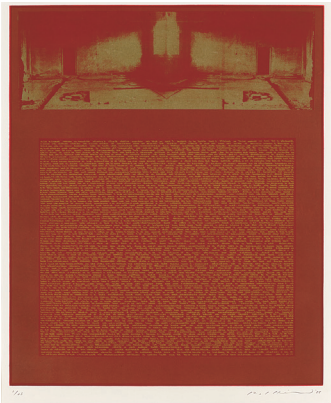

図2　池田良二《記憶の沈澱》1988年
銅版（フォト・エッチング、その他）・手抄紙
東京国立近代美術館蔵

一九〇八年北米航路を通る船について北海道や東北沖での航行の安全をはかり、航空機と無線電信を行うために設置されたのがこの無線送信局で、その後現在の場所に移設された。一九二九年のドイツ飛行船ツェッペリン伯号の世界一周旅行や一九三一年のリンドバーグの太平洋横断飛行の際に交信したことで知られるなど、さまざまな歴史的事件に立ち会ってきたが、一九六六年に札幌中央電報局に統合され廃止された。

一九九〇年に正式に池田の個人スタジオとなったこの無線送信局を舞台に、二〇〇八年からは銅版画家の井出創太郎（一九六六―）と高浜利也（一九六六―）のアーティストユニットが主体となり、アートプロジェクト「落石計画」を毎年八月に開催、二〇一八年で十一回目を迎えた。このたび、この落石計画に参加する機会をもったので、池田良二の原風景に触れつつ、落石計画とその意味について考えていきたいと思う。

池田良二《記憶の沈澱》

廃屋と化した旧落石無線送信局が素材となった池田の銅版画は、いずれも写真の転写をもとにしたフォト・エッチングという技法を用いて制作されている。祭壇画や祈祷書を思わせるような左右対称の構図。深い沈黙に包まれた記憶や郷愁が結晶化されたようなその画面は、時の流れや空間の拡がりへと観る者の想像力を様々にかきたてる不思議な魔力を秘めている。「移りゆく時間の堆積」という特徴は、すでに一九七〇年代のインド・シリーズにも現れており、詩人の岡田隆彦は、「決して明瞭でない過去やどのように進むか予測できない現在と未来は、多義的な点の集合離散のうちに暗示され、油彩における地塗りのようにぴったりと貼られた和紙の半透明な皮膜のうちに捕獲される」［註1］と表現した。

画面の三分の二以上を埋め尽くすのは、腐蝕によって、厚みを増した質感豊かな文字の層（テキスト）である。整然と並ぶその文字群は、しかしながら左右反転させられ、意味をなさず、文字や文章は判読できない。その上に配されているのが、合わせ鏡のように左右相称の写真イメージである。たとえば《記憶の沈澱》［図2］では、かつて使われていた時代の生活の痕跡や汚れの残る廃墟の内部が画面上部の薄闇に拡がっている。

屯田兵の末裔として北海道根室町（現根室市）に生まれ、自らの根源を風化した旧送信局に見出した池田にとって、廃墟の中を覗くのは、まさに心の奥を見つめる作業であったろう。銅板の腐蝕により重層化した文字は、長い時の推移でもあり、記憶の層をたぐるように遠い記憶と結びつく。入念に選ばれ、加工され、配置されたイメージとテキストが、相互に補完しあいながら、沈黙に包まれた昔の記憶と不在感を呼び起こすのである。この旧無線局は単に作品のモチーフにとどまらず、取り巻く自然環境や風化などと、腐蝕や間接技法などの腐蝕銅版画の特性とが相互に重なりあう点でも重要な意味を担っており、池田の銅版画は過去と現在を行きかう境界ともなっている。

落石計画第十一期　銅版画試論Ⅱ
「つくる、くちる、つくる、」

池田の個人スタジオとなったこの無線送信局について、改修を加えられ「廃墟の状態から脱しつつある」と読んでいたが、実際に建物に足を踏み入れると、壁ははがれ落ち、落書きが壁に点在し、鉄扉から落ちた鉄くずが積み重なって、劣化の痕跡があちこちに残る廃墟そのものに見えた。とはいえ、天井の防水工事を施した後で、雨漏りによる浸水もなく、今年は環境はずっと改善されたのだという。要するに改修とは、劣化を食い止める補修くらいの意味らしいのだ。ともあれ、より快適な環境での「落石計画」十一期開催となった。

「落石計画」では毎夏、廃板となった銅版を敷き詰めた対話空間（＝銅版による茶室）［図3］の公開制作をはじめ、若手アーティストを交えた展覧会や地元の子どもたちとのワークショップが開かれている。芸術祭とも芸術を通して地域の活性化をはかるのを主目的に掲げる最近の動向とも異なり、版画、なかでも銅版画に潜在する腐蝕、間接技法、複数性、社会性などの問題と厳しい気候条件のなかで加速度的に劣化する旧落石無線送信局のサイト・スペシフィック的な問題をからめながら、制作や作品への問いを深め、発信していく真正面から版画と取り組んだ異色なアートプロジェクトである。

「銅版画制作における様々な特性（他者への依存性、複数性、偶然性、即興性、物質性、社会性等）に焦点を当て、あえて旧無線送信所という辺境の〝現場〟で展覧会（社会的実践）を開催することで、美術館等のホワイトキューブ（中立的な展示空間）では見えにくい、社会の中での銅版画の位置付けや機能を実地に検証」［註2］しようとした二〇一二年の「第5期 銅版画試論――つくること、ゆだねること――」の続編である第十一期は、銅版画試論Ⅱ「つくる、くちる、つくる、」がテーマ。場の強い磁場を感じながら創り進められている銅版茶室「対話空間」の一方で、普遍性のあるホワイトキューブを念頭に置き、自由な展示場所の変更や移動を想定された工房で刷られたふたりの版画も持ち込まれ、展示された。場への依存性の異なるこれらの作品を共存、対置させて両者の違いを際立たせ、約十年間創り進められてきた銅版茶室の意味を再考し、あわせて朽ちることの象徴としての銅版画の在り方をあらためて問いかけようというものだった。

井出創太郎＋高浜利也

今回はさらに仮設的ではなくこの場に展示され続ける作品として、高浜の《朽ちる家／落石》［図4］が加わった。雁皮紙に摺った20㎝程度の四角い版画を碁盤の目のように縦横に並べてヤマト糊で直接壁面に貼った作品は、銅版茶室の石膏キューブや井出の緑青摺りの色彩も意識され、自ずとこの会場になじんではいたが、脆弱な紙に刷られているため、湿気で版画が壁から剥がれ、あるいは黴（かび）が繁殖する可能性もあり、一年後どう変化してこの場にあるか、高浜自身ですら想像しきれないという。

しかし今回の企図に反して、筆者には常置され劣化にさらされ続けている銅版茶室も、外部から持ち込まれ仮設的に展示されている作品も、さほど場の意識の差や対立を感じることはなく、違和感なく空間の中で共存しているように思われた。線的、動的、暗色系で力強い高浜に対して、面的、静的で薄い緑（緑青）色の繊細な井出というような、ふたりの作風の違いが、変化をつけているのも事実であるが、むしろ「対話空間」という名のとおり、対照的なふたりが相互にこの場を意識し、対話しつつ、組み合わせて銅版茶室を創っていることの意味が大きく、両者は相互になじんで全体を形成しているように思われた。銅版茶室制作当初に設置された底辺の石膏キューブには、絵が消えかかり白色化したものもあり、また結露もしくは水滴が滴り落ちてでこぼこに侵食されたものもあった。しかし、それらも新たに加わった石膏キューブと一体となって、延々と完成しない銅版茶室を形成している。一方で、井出の紙や廃銅板上の、乾燥し生命を失った植物の痕跡は、版画化され空間に放たれるなかで、息を吹き返し生き生きと呼

図3　井出創太郎＋高浜利也《対話空間/銅版による茶室》2008年―　銅版（エッチング緑青石膏刷り、エッチング刷り）、石膏、廃銅版、銅版 2018年8月撮影
写真提供：井出創太郎

図4　高浜利也《朽ちる家／落石》2018年
銅版（エッチング、アクアチント、ドライポイント、その他）・雁皮紙、糊

図5　井出創太郎《piacer d'amor bush〈光射の器／風の影〉》2018年　銅版（エッチング緑青刷り）・五箇山雁皮紙、ハーネミューレ紙

吸しているように見え[図5]、高浜の家や樹木や街は、あいまいにされ、認識しづらくなっていても、決して「在る」という存在感を失ってはいない。時の推移や生や死、在るということのリアリティなどと純粋に向かい合う貴重な場がここにあり、そのことが彼らの銅版画にも密接に関わりあっているように思われた。

この周辺は、太平洋上にできた高気圧から流れ込む暖かい空気が、根室沖を流れる寒流の冷たい海水面にぶつかり発生する海霧（ガス）が発生しやすく、海霧によって水分が補給される高層湿原（落石岬湿原）が拡がっている。土壌も植物が枯れても完全に腐ることなく、分解が抑えられた植物遺体が堆積する泥炭地だという。絶えず塩分を含んだ海霧にさらされるこの旧送信局にあって、「劣化」や「死」は日常で感じるよりもはるかに意識させられるのであろう。なるほど鉄扉や天井や壁の痕跡は、劣化のスピードや激しさを物語り、長年の時の積層も感じさせる。しかし同時にこの建物には、時が止まったような静寂や荘厳な重厚感も備わっている。

今回のテーマは、「くちる」で終わらず、「つくる」が付いて、さらに継続を示唆する「、」が付いている。「落石計画」は完全に腐らずに積み重なっていく泥炭地層に似て、泡のようにできては消えていく一過性のものではなく、変容を伴いながらも、在りつづけることの意味を問い続けながら展開しているといえるのではないか。興味深いことに、まさに「くちる」ことを問題にしつつも、時を超えたモニュメンタリティを有する池田の作品世界と根底で緊密につながっているように思われるのである。

地元の子どもたちを迎えてのワークショップでは、「落石になる」をテーマに、落石のことを思い浮かべて、絵をシルクスクリーンでTシャツと横断幕に刷った。毎年参加する子どもも多く、上は高校生までと年齢層も幅広いが、みな飲み込みが早く、美大生や美大出身の社会人からなる「オクチシ隊」の的確な指導とサポートもあり、午後には刷り上がったTシャツが次々と乾かされていった。花咲ガニや昆布、湿原に咲く花など、思い思いに描かれた絵には、どれも温かい地元愛がにじみ出ていた。時や場や人々を相互に結びつけ、都市と地方、過去と現在といった対立を超えて行き来するなかから、広く発信し中継者たらんとしてきた無線送信所の機能にもこだわる「落石計画」。

図6「落石計画」第11期集合写真
写真提供：井出創太郎

毎年回を重ねるなかで、スタッフと地元の人々との交流も深まり、着実にこの地に根付いてきているのも感じた[図6]。

大量の情報が飛び交い、変化のスピードが速い現代社会にあっては、ついつい我々は見せかけの表層に翻弄されてしまいがちであるが、ここには都会の喧騒とは別の非日常的世界があり、都会での日常をリセットし、見失いがちな生と死や在ることの意味と深く向き合える場がある。また地元の人たちとの交流もかけがえのない場となっているのであろう。毎年夏に旧落石無線送信局に来て、「落石になる」ことに惹きつけられた人々によって、11年もの間支えられてきたこの特異なアートプロジェクトは、今後も積み重ねられようとしている。

（美術課主任研究員）

※なお、池田良二《再生される扉》（一九八八年）が、一月二十九日～五月二十六日の間、所蔵品ギャラリー二階に展示されます。

註

1　岡田隆彦「陰影による時間の凍結」、『池田良二銅版画』展パンフレット、シロタ画廊（東京）、一九七八年三月。

2　「落石計画第5期 銅版画試論――つくること、ゆだねること――概要」『落石計画第5期 銅版画試論――つくること、ゆだねること――』図録、二〇一三年三月。

次号予告　2019年4月1日刊行予定

現代の眼 631

On view
福沢一郎展　このどうしようもない世界を笑いとばせ
The 備前―土と炎から生まれる造形美―

2019年1月1日発行　現代の眼　630号
編集：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館
編集・制作：美術出版社 デザインセンター
発行：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館
〒102-8322　東京都千代田区北の丸公園3-1
電話03(3214)2561
表紙：ワサン・シッティケート《私の頭の上のブーツ》1993年　作家蔵
撮影：マニット・スリワニチプーン

MOMAT支援サークル
木下グループ　LUXURY CARD
三菱商事　DNP大日本印刷　AVANT
SANMI　鹿島建物　Marubeni
パシフィックコンサルタンツ　JEOL 日本電子株式会社
SEIKO　ANA Inspiration of JAPAN　A STAR ALLIANCE MEMBER
MS&AD 三井住友海上